

伊勢氏綱が古河公方を傀儡に欲するようになり、真里谷信保も小弓公方を傀儡にするつもりだった。

ところが、どうか。

名ばかりの大義にするつもりが、義明は頭角と威厳を発揮し始めたのである。

焦りは隠せなかった。

それを見透かしたように、義明が呟いた。

「里見を動かすか」

真里谷信保は困惑した。

安房からの長駆は困難と反論したが

「今のままよりは、ずっとよい」

「しかし」

「が、結果より、流れを変えることが大事だ」

義明は膠着する戦線に、苛立ちを覚えていた。

一石投じて、更に波風立たせることが、打開に繋がるかと英断したのだ。

「祥仙、参れ」

義明は逸見入道祥仙を招き寄せた。

この者もまた、真里谷氏同様、武田一族に連なる人物である。しかし武威よりも知謀に長けており、義明に見出されるまでは、随分と過小な扱いをされてきた。真里谷信保は父の代に芽の出なかった祥仙を軽視してきた。

「この者、我が手に欲しい」

惜しまず義明に献じた祥仙は、そこで頭角を現した。小弓に落ち着いてからは、主に義明の軍師のような役目を担っていた。信保より重く用いられ、かつてとは立場も逆転したような様である。

「祥仙、稲村城へ行って参れ」

「安房ですか？」

「里見を、動かす」

「はい」

逸見入道祥仙はじつと義明を見て、その真意を目から呑み込んだ。そして、大きく領きながら、口説くのが骨を折ると呟いた。

「ここで戦果を示して、忠節を示してもらえばそれでいい。儂は決して、悪いようにはせぬ。里見家当主に、そう伝えるがよい」

「御意」

祥仙が発つと、義明は真里谷信保をみた。

「これで奮起せねば、男がすたるな」

「は」

信保の額から、ぽとりと、汗が落ちた。

足利義明の使者に立った逸見入道祥仙は、稲村城に赴くと里見義豊に対し

「直ちに千葉を攻めるよう、公方様の仰せです」

と、明瞭に伝えた。

傍らの家臣でそれなりの理を口にしたのは、

里見実堯のみであった。

「ただ戦果を示して、忠節を示してもらえばそれでいい。公方様のお言葉ぞ」

逸見入道祥仙も相手の力量で接し方を計る賢い人間だ。里見実堯は断じて侮れないと察し、言葉を改めながら助勢を懇願した。

「叔父上、当主は儂です」

義豊は実堯を制した。

「小弓公方様の仰せは粗略に出来ませぬ。されど里見家も（一統）されぬ奇騎豪族の長にて、長駆は容易ならざり」

義豊は拒む意図を示した。逸見入道祥仙は息を吐きながら、じつと言葉を嚙んだ。

「玉隠和尚と儂は、懇意でな」

義豊はそう洩らした。

玉隠英瑠という鎌倉の高僧に、足利義明も遠慮が多い筈と踏んだのだ。しかし、逸見入道祥仙の発した言葉は、意外なものだった。

「一統を口にする者、他力に頼るとはまだまだ。少なくとも公方様は誰にも頼ることはない。そろそろ観念せい、小僧」

従わねば里見を攻めるという気迫で、逸見入道祥仙は語尾を強めた。

理想論ばかりの義豊には、その先の決断がつかない。それを察して、実堯が口を差し挟んだ。

「さてさて、高貴な御方の気儘による使い捨ては、迷惑千万」

とぼけた口調だ。

しかし、これが、張りつめた空気を弛緩させた。逸見入道祥仙は笑みを溢しながら

「粗略には致さぬこと、儂が保証しよう」

その言葉に、実堯も微笑んで、応じる旨を義豊へ打診した。額かぬ訳にもいかない義豊の承知で、この場は円満に収まった。

「それにしても」

稲村城下の運河について、逸見入道祥仙は卓見を評した。いつかは伊勢氏綱と戦う備えとして、慧眼このうえない。そんな言葉に、義豊は俯いたまま声も出なかった。

十
十
十

下総の風(2)

夢酔 藤山